

忘れられた明治史

1

史明治たれ

木村 毅

1

明治文献

忘れられた明治史 1

致しました。
了解により省略
検印は著者の御

昭和四十八年十月二十日 第一刷発行

定価 八五〇円

著者 木村毅きむら たけし

発行者 藤原正人

発行所 株式会社 明治文獻

一七一 東京都豊島区池袋二一〇七〇

電話東京(四)〇五二一(代表)
振替 東京三六二九〇番

乱丁・落丁のものはお取替えいたします

印刷・高長印書局 製本・昭栄堂製本
©K.KIMURA Printed in Japan

0093-000301-8309

忘れられた明治史

1

序

不世出の天才が、ゆたかな空想、すぐれた創造力を、縦横に駆使して成った傑作は、もとより珍重すべきであるが、埋没した稀有の事跡をさぐり、刻苦して構成した作品も、別に卑下せねばならぬ理由はない。

あれは明治文化研究会が創立して、しばらくしてだから、大正十四年の二、三月ごろではなかったらうか。

ある日、吉野作造先生の面会日（毎週木曜日）に訪ねると、すこし時間が早くて、他に誰もきていない。先生は私を面会室の応接間から二階の書斎にいき

「この本を知っているか」

と云って、示されたのは百頁余の小冊子。表紙はペラペラ紙で簡単に『西哲夢物語』とのみ印刷し、輪部以外は意匠もほとんど加えてない。中も乱雑幼稚の組み方で、一見、輕蔑をさそいそうな粗末な外見である。

「いいえ。全く存じません。これがどうかしたんですか」と、きくと、

「明治政府をでんぐり返すほどの大きな影響を与えた。保安条例は、この冊子が原因で發布されたというのが真相のようだ」と云われる。

保安条例は明治二十年十二月二十六日に發布された薩長藩閥政府の大クーデターで、尾崎行雄、中江兆民、星亨、竹内綱（吉田茂の実父）など五百余人が、二十四時間以内に、東京三里外の地に退去を命ぜられたので、ナポレオン三世が皇帝になる野心を遂げる前ユーゴー等に加えた

クーデター、ロシヤのアレクサンドル三世の虚無党鎮圧令、ビスマルクのドイツ社会党鎮圧令にならったとせらるる暴法である。

それは条約改正にたいするボアソナードの反対書や谷干城の反対上奏文を、入手して秘密出版して頒布した者のあるのが原因だと一般には思われていた。

ところが吉野先生の云われるには、それらも伏線であり、一原因はなしたが、いまだ、政府をしてあの暴挙に踏みきらせるほど有力ではなかった。これは政府が条約改正案より、もっと嚴重な秘密裡にすすめていた憲法草案を盗みだして、印刷に付して全国にバラまいた事件だ、と。

明治十五年、憲法調査にヨーロッパにもむいた伊藤博文は主としてシュタインとグナイスト両博士のもとで、大学生がゼミナールに出席するようにして、みっちり憲法の講義をきいた。というよりむしろ、自分らが、これから手がけて作らねばならぬ日本の新憲法の下書きを作ってもらった。

その噂は、いつからとなく日本につたわり、いよいよ伊藤が帰朝して、憲法草案の作成にかけると、民間の自由民権論者は、ドイツ流の国権勢力のアクのつよい、圧制憲法をつくっていると云って、ごうごうと攻撃して止まない。

「そんなことはない」

と、否定し、ひた隠しにすればするほど、騒ぎはますます大きくなり、それにつれて政府は一そう秘密度をきびしくするという状態であった。

伊藤は、神奈川県金沢町沖の無人の孤島夏島に、新たに別荘を設け、そこに憲法草案の実際の執筆を三人を鐘詰めにして、全く外界から遮断するほど嚴重な警戒体制をとって執筆をすすめていたのに、何者かがこっそりとその草案を盗みだし、秘密出版に付した者があった。くり返して

云うがそれが『西哲夢物語』なのだ。

今まで口をぬぐって否定していたドイツ流憲法をじつはひそかにつくっている真相が、これで白日の下に曝露されたのだから、伊藤を首脳とする政府は周章狼狽おくところを知らず、遂に最後の手段として、いわゆる伝家の宝刀をぬいて、保安条例発布の非常策を用いざるを得なかったのである。

しかもこの大事件の犯人が、ついにしまいまで、捕われずに、八十余年後の今日まだ謎のままになっているのは、警察制度が世界一といわれる日本としては、まことに珍妙不可思議のことである。

吉野先生の専攻は政治史で、大正のはじめヨーロッパ留学から帰ると、まず第一次ヨーロッパ大戦原因論を「歐洲動乱史論」と題して講じ、ついで青年時代袁世凱の私宅教師をしておられた関係で、「支那革命史」を講じ、最後に、身近かの日本政治史を講ずるため、その近代史の研究に着手せられた。これが先生の明治文化研究の出発点だ。

たまたま東京帝国大学内にある国家学会の創立三十年にあたり、先生はその委員として奔走せられた。この国家学会は主として伊藤博文のすすめにより、新らしく発布される憲法の学問的研究に当る機関として作られたもので、伊藤は自著『憲法義解』と『皇室典範義解』の版權を寄贈して、その印税を学会の費用に当てしめていた。

その三十年記念が来たときには、明治の憲政確立に身を以って当った遺老がまだ幾人か健在なので、親しく回顧談を詳しく聞くこととし、五箇条の御誓文の作成に係属した福岡孝弟から、憲法起草の衝に直接にあたった金子堅太郎、改進黨の設立者大隈重信、自由党の設立者板垣退助、紙幣整理の松方正義、財界長老の渋沢栄一、徴兵制度の山県有朋が生きていて、みなその乞い

に應じ、長講に應ずるなり、又はながい原稿を送ってくるなりした。（これは『明治憲政經濟史論』と題して大正八年四月發行。今日みてもまことに貴重資料である。）

ところで明治憲法は、伊藤博文を冠冕にいたたいて主として井上毅、伊東巳代治、金子堅太郎の三人が實際には初稿を執筆したのだが、その中、井上は早く死し、伊藤もハルビン駅頭で暗殺せられたが、金子と伊東は大正なかばになっても猶お健在で、金子は前記のとおり、心よく講演に應じたものの、伊東巳代治はどうしてもひき受けない。いろいろ複雑な秘密が伏在して、これを公けにすることが国家のためにならぬといつて固く拒絶する。

そこで法科大学の大長老、樞密院では伊東と並んで同僚の顧問官であり、現に国家学界評議員長であり、吉野先生には大恩師の穂積陳重博士を動かして、膝づめ談判で懇請したが、伊東はどうしても「うん」と云わぬ。

ばかりか穂積博士まで、「だんだん内情をきいてみると、なるほど、それでは公表できないと、私も彼の講演拒否に、賛成する気もちになった」との報告であった。

しかし吉野博士はあきらめなかった。

「そんなに、かつての政府当路者が秘密に隠匿するなら、よし、民間の手で調べてやる！」

これが先生が、デモクラシイの闘將から転身して、明治文化研究会を設けてその方に全力をうちこむ気もちになられた発端であった。（私は何度も先生の口からその話をきいた）

そして先生は、いろいろな事をしらべ出していると、中には文久二年に神田孝平がオランダの探偵小説を翻訳しているという珍発見もあれば、また保安条例發布は『西哲夢物語』の秘密出版が主たる爆源だというような重大な事実も洗い出されてきた。

但しその『西哲夢物語』がどんな本かは、誰れに尋ねても分らず、どの古本屋でも見かけな

い。全国の自由民権志士にバラまいたのであれば、よほど多くの数が出たろうに、影も形も手がかりが無いとは不思議である。

そこであるとき、朝日新聞が、「さがしている物」というような題で諸名家に短文の寄稿を求めてきたので、それに『西哲夢物語』の話をかくと、たしか岐阜県（といわれたように思う）の田舎から一冊送ってきた人があった。

頒布部数は、どんなに多くても、政府の弾圧探索もきびしくこの町村では誰れだれが自由民権論者か、警察の調査はゆきとどいているから、凡そその秘密出版の送られてきそうな先きをつきとめて、ほとんど完全に押収したのである。だから、この書はめったに見つかからないのだ。しかし――

「私の家では仏壇の下に隠して、取りあげられるのを免れたと先祖から聞いております。出したら引っこくられるという厳しい云い伝えで、今日まで護持してきました」という意味が、それに添えた手紙には書いてあった。

だから吉野先生は、わざわざ私を書斎にひいて、それを示されたのだ。

しかしその草案を盗みだし、『西哲夢物語』を秘密出版した人は、政府の公けの手では、遂につかまらなかったが、民間では誰れいとうとなく評判をつたえた。張本人は星亨で、実際に主として働いたのは、その弟子で後に政治講談師になった伊藤痴遊（仁太郎）である。

そこで明治文化研究会では、伊藤痴遊を呼んで、そのときの思い出話をしてもらった。その概要は明治文化全集の月報「明治文化」の第七、八両巻ののっている。

これを手がかりに、私は銀座鳩居堂、金沢にのこる旅館千代本、箱根の福住楼、横浜の花柳界関内をはじめ関係の個所をしらみつぶしに歴訪して昔を知っている人をさがし、ほんの断片でも

珍重して掻きあつめたうえ、それでもつなげぬ部分は例の便利な手の空想で補うて、でき上ったのが、この一篇である。

昭和三十六年村松梢風が急死した後、その「名勝負物語」の後をついで「明治政界秘話」と題し、三篇の物語を連載した中間の一篇がこの物語である。

「明治政界秘話」の第一話「明治天皇政治系図」は大たい、後にかいた伝記小説『明治天皇』（文芸春秋社発行）の中に吸収し、最後の第三話は「日露開戦前夜」というのであったが『密使』と題して独立書冊として刊行した。（昭和三十七年・東都書房発行）

第二話は「鹿鳴館の夜嵐」と題したが、一冊の本にするには少々短いので、出版をひかえている中に、切抜きを見失い、今日に到ったが、じつは私の書いたものの中では、自分として一番気に入っている作だし、ちょうど紛失していたのが見つかったから、幸い明治文化研究会創立五十年もきたので、その設立者吉野先生の学恩を追慕するため、刊行することにした。

なお、『西哲夢物語』はその後『明治文化全集』に全文おさめられているが、原本は天下の珍藉であり、稀覯書で、その後発見せられたのも、「絶無にして僅かにある」状態である。幸い柳田泉君が古本屋の店頭、街路に面して埃まみれになっている見切り物の函の中に、十銭で見つけて寄贈してくれたのが手もとにあるので、その表紙を原色版にして巻頭にのせておいた。いまに原物そのままだに復刻して墮滅を防ぐとともに同好に頒ちたい念願である。

しかしこれでは少し紙数が不足なので、「星旗樓秘聞」をつけ加えた。私の作としては最初期のもので、これも自分で氣にいつている。昭和五年、ヨーロッパ留学から帰ると「サンデー毎日」に連載したので、第一回で逸早く、正宗白鳥氏が目をつけ、その文芸時評で私の「健筆」をほめてくれたが、「西園寺公望公を題材にしているらしいのに探偵小説くさいのが氣になる」と云った。

親しい先輩の加藤武雄氏は「いつそ西園寺望一郎と本名を書いてしまった方がよかったではないか」と忠告してくれた。西園寺公は青年時代、フランス留学するにあたり、平民をまねて望一郎と改名していたのである。

これは「パリ・コンミュン」を背景にした小説だ。それは後に友人大佛次郎氏の『巴里燃ゆ』の長編続編物で有名になったが、この私の作はそれに三十年先んじているので、つまり「パリ・コンミュン」を日本で小説に書いたのは、私のこの作が最初ではないか。それより前には堺利彦氏の「パリ・コンミュンの話」という十銭パンフレットが一冊出ていたくらいなものだ。しかし西園寺公がパリ・コンミュンの真最中にパリに滞在して、実地にこれを見聞している事実は堺氏はじめ平民社時代の人は全く知らなかったようだ。（昭和になって白柳秀湖氏は注目していた）

ここに出てくるリサガレイが、悪虐な謀反としてブルジョア政府から宣伝せられたパリ・コンミュンの悪名に、コペルニクスの転回を加えて、これが世界最初の本当のプロレタリア政府の意義をもつことを、世界に、又後世に明かにする材料を提供した功績者なので、その著『パリ・コンミュン史』はマルクスの著が理論的説明を与えたのに対し、その事績を明細に示したので両面ならんで不朽の名著だ。リサガレイのその点が分っていなかった加減か、連載中、この作は大衆的歓迎を受けたとは云えない。

しかし識者の中には注目した人もあつたらしく、たとえば故人の恒藤恭氏が興味をもって読んでいたという話人をうづてに聞いた。高等学校時代、芥川竜之助と主席をあらそうたこの秀才は、そのころ京都大学法科の新進教授で、その左翼的な急進傾向の学説は、多くの青年をひきつけていた。その人から読まれているということが、まだ若かった私の執筆進行を大いに勇気づけて

くれたものだった。

二編をあわせて「明治政界秘話」として世におくる。

昭和四十八年七月

木村
毅

鹿鳴館の夜嵐

アラビヤ夜話

一

河原湯を出たところを、いきなり呼びかけられた。

「おい、千ちゃん」

「あら、生薬屋の兄さん……おめずらしいわねえ」

「しばらく見んまに一段と女ぶりをあげたなあ。その髪、なんというんだい」

「これ」と湯道具をかかえておらぬ右手を、うしろにまわして、タボにさわってみて「ただの高島田よ」

「よくいう文金高島田という奴だな。だが、それだとお嬢さまがゆう髪じゃないんか」

「きのう御婚礼のお祝いのお座敷によばれましたの。あらたまった儀式のときは、これでなきやあいけないんです」

「道理でおちついていて、お前にしちやあ上品だと思った。風呂で特別にみがきかけたかげんか何かしらんが、見ちがえるようにきれいだぜ」

「ありがとう。ちよっと、それこそホンのちよっと、手入れしただけなんですがねえ」

ちよっとの一語に力をいれ、いたずらっぽそうに笑って、片頬を人さし指のさきでおさえ、口びるを上下いっしょに吸いこんで、開いてボンと、びんの栓でもぬくような音をたてた。

「地肌がもともと、ちがうからねと言うんだろう。ハハ……背負ってやがる」

「これ、お太鼓じゃありませんよ」

しめたふだんの半はば帯を、胸のあたりで、かるくたたいてみせた。

「ときにどうだ。一ばい、つきあわんか」

「だって兄さん。あがらんじゃないの。この方は」

ここで湯道具を右手にもちかえ、左手の指をまるめて二三度飲むまねをしてみせた。

「もちろん氷水だよ」

「いえ、あれだと、いけないんです。あたしたち女のからだには。冷えますからね」

「そう言やあ、女のケツときたら年中つめたいもんで、あったかいのは土用三日つきりだときいたことがあったようだね。……だがお前、もうじきその土用のいりだぜ」

「あら、そうだったかしら」わざと、すっとぼけたように言って「そんならいたたくわ」

はじめから、じっさいに、ことわる気はないので、ただムダ口をたたいてみるだけのことだった。ふたりは、いわゆる言葉がたきという仲で、出あいがしらにはこうして、愉快そうに口角の火花をちらすのがくせである。

住吉町——という名は、全国いたるところにあるが、これは横浜関内で早くからきこえた花街なのである。梅雨あけの午後は、ひっそりと静かだった。

男は尚武革のひものついた木刀を、杖がわりに引きずりながら、さきに立ってあるいて胴間声をはりあげて、うたいだした。

「一刀両断す君王の首。天日光は寒し巴里城」

鹿鳴館時代、急進青年のあいだに愛誦された中島勝義作「断頭台」という詩である。